

2015 vol.33 夏号 源流からのたより

ぽたい!

源流のひとしづく



CONTENTS

- ・事務局長コラム
- ・「源流学」⑧
- ・源流の主役たち
- ・吉野山ロープウェイ
- ・吉野川紀の川しらべ隊
- ・源流学の森づくり



森と水の源流館



住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
公益財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

『森守募金』へのご協力をお願いします

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局長 尾上 忠大



みなさんはこの財団の活動財源について関心はありますか？ 公益財団法人の義務として「事業計画」や「活動報告書」またいわゆる決算に関する計算書などは、ホームページや事務所でも閲覧をいただけるようになっていきます。

さて今回のお話は、財源の一部となります『森守募金』についてです。本財団の「寄付金に関する規程」によって運営されるもので、吉野川紀の川の水源地域の環境保全、向上のための処置ならびに啓発及び教育活動に寄与することを目的としています。

特定公益増進法人への寄付・募金は税法上の優遇措置の対象となります。当財団は奈良県知事より「公益財団法人」としての認定を受けていますので、個人の方は寄付金として所得控除（所得税法78条）を受けることができます。法人の方は通常の一般寄付金の限度額とは別枠での損金算入としていただくことができます。（法人税法37条4項）もちろん、ご希望があれば領収証の発行もいたします。

かたい内容から始まりましたが、これまでみなさんからお寄せいただいた『森守募金』の主な使い途についてご報告します。

- ① 流域の小学校4年生へ教材の配布
(毎年約18000部ずつ)
- ② 「水源池の森」保全のための啓発看板の設置
- ③ 流域の斜面地の土留め木柵の設置
- ④ 川上村風景再生事業立上げ時での見本区画への植樹



②



①



③

土留め木柵については、その後年々の強い雨の影響で損傷を受けたものもありますが、いずれも水源環境の向上に役立つと考えています。

ツアーや学習会などで「水源池の森」へ立入りの際の参加費に含めて徴収する環境協力金（大人500円/人・小中高生100円/人）の全額も『森守募金』に充てられています。吉野川紀の川の貴重な水源となる森の役割を体感いただいたうえで、「これを一緒に守っていきましょう」というお気持ちをお受けさせていただいています。また森に入らない多くの方々からも尊いお気持ちを寄付や募金としていつも預らせていただいています。下の新聞記事は、陶芸作家の古野幸治氏（大阪工芸協会副会長）が主宰の陶芸教室「土工房 轆轤（ろくろ）」学園前工房の有志のみなさんが奈良市美術館での作品展で行ったチャリティ販売での収益約31万円を募金としていただいたことが紹介されたものです。

このとき、このご縁を取り持っていたいただいた特定非営利活動法人奈良21世紀フォーラムからも別に多くの寄付を賜りました。古野先生によると、轆轤の作業は「水ひき」とも言われるそうです。陶芸は水と土と炎によって生まれる芸術。日頃から水の重さを理解されるみなさま一人一人のお気持ちの重さを預らせていただきました。大切に活用させていただきます。



(平成 27 年 5 月 9 日毎日新聞)

森守募金は森と水の源流館・郵便振替口座にて受付ています。
郵便振替口座 00950-2-331164
「水源池の森守募金」あて

5月2日(土)



源流学の森づくりとは、20年ほど前に伐採され、再生しつつある天然林を立派な源流の森に戻そうという取り組みです。山小屋を拠点に、除伐したり、作業歩道を補修したり、土留めや獣害防止について考えたり、試行錯誤しながらみんなで森を整備しています。

森づくりの現場までは、車を停めてからさらに徒歩で約1時間かかります。伐採した木を搬出するための作業道だったところをずつと歩くのですが、年々崩壊がひどくなってきているようで、一度伐採されてしまった森がなかなか元通りには戻らないことを改めて思い知らされます。

今回は、源流人会会員さん9名がボランティアで作業してくださいました。初めての参加という方も2名おられました。主な作業は、藪になっているところの木を除伐して1本1本に日が当たるようにしたり、伐った木を適当な長さに小切って積んで土留めしたりというものです。時間も人手も限られているため、森づくりの作業の進捗状況は微々たるものです。しかし、それぞれの力を合わせて

しっかりとできることを行いました。最後に森を見渡してみると、少し明るくなっているのが何よりも嬉しい結果です。

森と関わったり、森を手入れしたりする「森づくり」という活動があららちから行われるようになりました。森づくりは林業と似ているようで、それほど構えて考えることはありません。話で聞いたり、写真で見たりするよりも、実際にやってみると、誰にでもできる作業がほとんどです。成果も大切ですが、人が森と関わっていくことが何よりも大切なことかもしれません。



奈良新聞(5月3日)に掲載されました



4月29日、新緑まぶしい中で、講師の尾上聖子先生(奈良植物研究会)に教えてもらいながら、大人も子どももルーペ



尾上先生に植物の名前や特徴を教えてくださいました

片手にじっくりと植物を観察しました。足もとには、春の七草のひとつ、ハハコグサをはじめ、ツボスミレ、ジロポウエングサク、ムラサキケマンなどの春の妖精と呼ばれる小さなお花がまだ咲いていました。

残念な発見もありました。特定外来生物のナルトサワギク(アフリカ南部原産)の侵入です。ひとまず抜いて駆除しておきましたが、危険な外来生物の侵入は山里にまでじわじわ広がっています。定期的な観察を通じて、このような変化に気



ジロポウエングサク



チゴユリ



駆除したナルトサワギク



四つ葉のクローバーを見つけて大満足!

づくことができただのは大きな成果でした。また、四つ葉のクローバー(シロツメクサ)を見つけた参加者の子どももいました。このように植物を通じて自然とのつながりを楽しむのも大切なことかもしれません。

毎

年5月の末から6月に入る
と、わが家では、ちまき作り
が始まる。昔は、どの家でも
作っていたが、今は集落でも数軒しか作
らなくなってしまった。ちまき作りも、
地域によって違うようで、笹の葉で巻く
所もあれば、ワラで巻く所、チガヤで巻
く所といろいろあるみたいだが、わが家
では昔から川原で生えているアセという
植物で巻いている。アセは一見すると、
ススキ（カヤ）と似ている。アセを採っ
ていた川原は、すでにダムの中に沈んで
しまい、ここ数十年は、近隣の川原へ採
りに行っている。

で

は、ちまきの作り方を説明し
よう。材料は、米の粉が1升
5合（うち、もち米は3合）、
熱湯7合、塩大さじ1。甘くない、昔な
がらのちまきである。重要なのは、米の
粉を混ぜるのに熱湯を使うこと。ぬるま
湯や水だと、ちまきを食べるとき、口
中にひつついて、食べにくい。あと、水
の加減も、柔らかすぎると、アセの葉つ
ぱにくつつくから、水の分量には気をつ
けてほしい。

ま

ず米の粉と塩をボウルに入
れ、しゃもじを使って、熱湯
を入れながら混ぜていく。熱
湯を入れ終えた後、手で全体を混ぜ合わ
せ、手のひらに載せたものを、ぎゅっと
固め、ある程度の塊を作って、蒸し器に
入れる。最後に残った粉みたいなものも、

そのまま蒸し器の中に入れて、
10分ほど蒸す。蒸したものを、
わが家では、餅つき機に入れ
て、よく練る。これは、おかちゃ
ん（嫁）のアイデアで、昔は
手で練ってたけれど、もちつ
き機を使うと、もちのような
やわらかい食感になる。もち
つき機がない場合は、しっか
り練ったら、おいしいちまき
になる。

ち

ぎったものを手のひ
らに載せ、拝むよう
に手をすり合わせる
と、二等辺三角形のようなも
のができる。これは端午の節
句にちなんで、男のシンボル
を形づけている。今では、端
午の節句は、5月5日の子ど
もの日となっているが、それ
では、アセが成長しないこと
から、田舎の節句は、アセが
成長する旧暦の5月5日にす
る。

巻

くのは、もっぱらお
かちゃんの仕事で、
わしでも難しい。ま
ず1枚のアセの葉でちまきを
巻き、4、5枚の葉があるアセ
を使って、巻いていく。詳し
くは写真を見てもらったらと
思う。

達ちゃんが語る

子どもたちに伝えたい「源流学」⑧子の成長願う「ちまきづくり」



ち

まきはもともと、保存
食として作られてい
た。自分が子どもの頃
には、わが家でも部屋の隅の長
押に竿を渡して、ちまきを吊る
していた。アセが乾燥してくる
と、時々、頭の上に落ちてきて
痛かったのを覚えている。それ
を焼いて、砂糖醤油で食べた時
の味はなつかしい。今では、文
明の力に頼って冷凍庫で保存し
ているおかげで、正月にでも食
べることが出来る。ちまきづく
りは、手間も暇もかかる。でも
それ以上に、子どもの成長を願
う母親の思いが詰まった食べ物
でもある。



- ①米の粉と塩、熱湯を混ぜたものを手のひらに取り、空気を向くように押し固め、蒸し器に入れる
- ②残った粉は蒸し器の中に一緒に入れる
- ③ちまきの大きさはピンポン玉より大きいぐらい
- ④手のひらを合わせ拝むようにして、すり合わせるのがコツ
- ⑤アセの葉1枚の上にちまきを置き、くるっと巻く
- ⑥4～5枚の葉のうち、まず左端の2枚に⑤のちまきを載せ、右側の葉で生地が見えないように包む
- ⑦先端部分の裏側に人差し指を入れ、右側にくるっとねじった後、折り込むようにして、頭の部分を直線にする。熟練の技が必要
- ⑧シュロで巻いて完成したちまきを5本1組で束ねる。食べる前にお湯でゆでると、アセの匂いがちまきについて美味しい

※連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。

さて、これらの抜け殻、河原にあると言いましたが、いったいどこにあるのでしょうか？サナエトンボの仲間は直立型の羽化を行うので、水面からさほど離れていない平坦な砂地や石の上で羽化をします。(写真3) こういった大きな岩には多数の抜け殻が付いており、さながら化石探みたいな感じがします。近づいてみると(写真4) オナガサナエの抜け殻がこんなところに付いています。また別の岩には(写真5) こんな感じでコオニヤンマの抜け殻が付いていました。別の岸際の石の上ではミヤマサナエが…あれ？コイツ動くぞ!?(写真6) ミヤマサナエは午前中に羽化を行うので、どうやらそのタイミングに遭遇したようです。羽化の写真を撮ろうと思いましたが、少し目を離した隙に逃げられてしまい(ひょっとしたら捕食されたかもしれない)、羽化を見る事ができませんでした。



写真: 3 羽化場所遠景



写真: 4 オナガサナエ

後半、やや採集記のようになってしまいましたが、なぜ今回抜け殻のお話をしたのかと言いますと、トンボの抜け殻があるということは、抜け殻が見つかった河川や溜池で、1) その種が確実に生息している証拠になるということ、2) 抜け殻の数を数えることにより、その場所の優占種が容易にわかるということ、3) 抜け殻は逃げないので、見つけたらその場でじっくりと観察できるということを伝えたかったからです。たとえば、オナガサナエは背中に突起がいっぱいいつているだとか、コオニヤンマは葉っぱみたいな形をしているだとか、種類によっては羽化する場所や高さが違うだとか、色々な発見ができると思います。

これから川に入って遊ぶ機会が増える時期になりますが、川に入る前にちょっと足元を気にしていただけただけなら嬉しく思います。



写真: 5 コオニヤンマ



写真: 6 ミヤマサナエ羽化直前



河原に脱ぎ捨てられた物



今回、吉野川の中流で採集したトンボの抜け殻を通じて、その発見場所や種類の違いについて紹介します。確認された抜け殻はサナエトンボ科6種（ダビドサナエ・コオニヤンマ・オナガサナエ・ミヤマサナエ・アオサナエ・オジロサナエ）エゾトンボ科1種（コヤマトンボ）でした。

抜け殻を探すことにより、その場所で確実に生息している証拠をつかむことができ、なおかつ優占種が容易にわかることができるので、河川で水遊びをする際の観察するヒントにさせていただけたらと思います。

古山暁（和歌山大学大学院生）

子どもの頃、よく服を脱ぎ散らかして親に怒られた記憶があります。ですが、怒られたところで全く反省をしなかったために、私は今でも片付けが苦手です。そんな私を余所目に、トンボ達が河原で子どもの頃の服を脱ぎ散らかし、続々と大空へ旅立って行っています。

山地の河川では、4月の末頃、中奥川でダビドサナエ（写真1）が盛んに羽化をし、岸辺のそこらかしこに抜け殻が付いていました。また、5月の初旬に訪れた蜻蛉の滝では、かろうじて1個体だけダビドサナエの抜け殻を見つける事ができました。これらの場所では、コヤマトンボやミヤマカワトンボ、オニヤンマやコオニヤンマ、ミルンヤンマが夏場に確認できるので、もう一度抜け殻を探しに行こうと思っています。北股川や三ノ公川には今年は抜け殻を探しに行っていないので、残念ながら何も情報がない状態ですが、ミヤマカワトンボやタカネトンボ、ミルンヤンマの成虫が7月頃に確認できるので、梅雨が明けたら時間を作って探しに行こうと思っています。

平野の河川では6月の中旬頃、吉野川の河川敷で色々な種類の抜け殻を見つけることが出来ます。（写真2）実は、写真を撮影している時に気付いたのですが、オナガサナエのつもりで持って帰ってきた抜け殻の中に、奈良県では希少種に選定されているアオサナエの抜け殻が紛れ込んでいました。去年は確認できていたのに、今年は見つけれなかった…と悔やんでいた矢先の出来事で、少し安心しましたが、そもそも現地でちゃんと見分けてこいよと、自分の力量不足を痛感しました。なお、この地点では抜け殻は見つけれませんが、シオカラトンボ・ギンヤンマ・アオハダトンボの成虫が確認されています。また、河原にはコニワハンミョウやアイヌテントウ、カワラバッタといった昆虫が元気よく走り回っていました。抜け殻を残して飛んで行ったトンボたちも夏になれば河川に帰ってきて、これらの昆虫と仲良く河原をにぎわせてくれることだと思います。



写真:1 ダビドサナエ♀羽化直後



写真:2 見つけた抜け殻
 上段左から：コヤマトンボ・コオニヤンマ
 下段左から：オナガサナエ・ミヤマサナエ・アオサナエ・オジロサナエ

その二〇

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します

吉野山ロープウェイ

2015年7月、幕末から明治時代にかけての日本の近代化を支えた23施設が「明治日本の産業革命遺産」として世界文化遺産に登録されました。

これら以外にも日本の近代化を支えた工場・鉱山・鉄道などのなかで特に価値が高いものは、近代化遺産（文化庁）・近代化産業遺産（経済産業省）・機械遺産（日本機械学会）として保護の対象になっています。そして吉野山とその周辺にもいくつかの近代化遺産が存在しています。

吉野山へと向かう観桜客で賑わう近鉄吉野駅の正面、リベットが目立つ古風な鉄塔を伝い、ひし形のロープウェイが登っていきます。この吉野山ロープウェイも機械遺産の一つです。

戦前、国内旅行が盛んであったころ、各地に観光を主目的とした軽便鉄道・ロープウェイ・ケーブルカーが次々と建設されていきました。吉野山にも吉野鉄道（近鉄吉野線の前身）が現在の吉野駅まで延長されるのに合わせて、昭和4年（1929年）にロープウェイが作られました。当初は大峯山洞辻茶屋まで延長

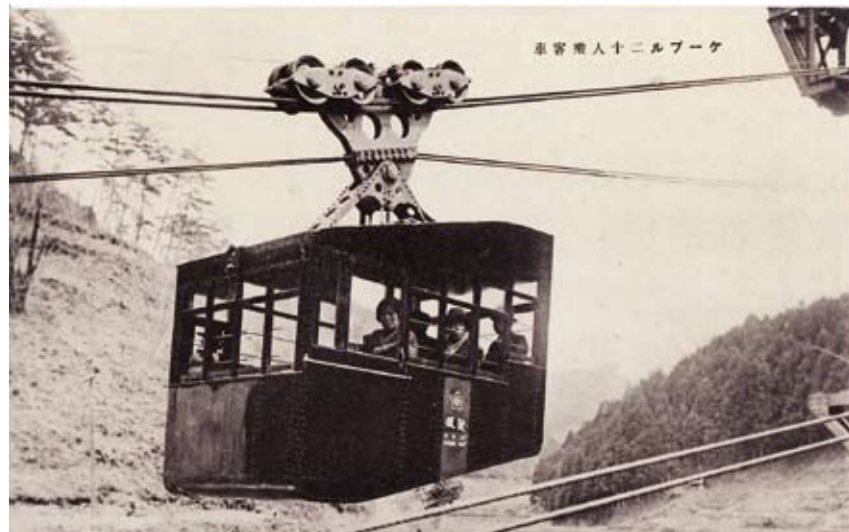
させる計画でした。

その後、戦時中に不要不急と判断された観光用の軽便鉄道・ロープウェイ・ケーブルカーなどは次々と撤去されていきましたが、吉野山のロープウェイは生き残ることができました。現存する日本最古のロープウェイであり、適切なメンテナンスによって鉄塔などが開業当初のまま現役で使用されていることが評価され、平成24年（2012年）に日本機械学会により機械遺産として登録されました。

吉野山に来られることがあったら、桜や蔵王堂だけでなく、吉野山を訪れる人の足として働き続けているロープウェイにも目を向けてみてはいかがでしょうか。



開業当時の絵葉書（遠くに完成したばかりの吉野駅が見えます）



開業当時の客車を写した絵葉書（ひし形の形状は現在も同じです）



絵葉書の量紙
（ロープウェイを建設した安全索道株式会社発行）



5月6日「吉野川紀の川しらべ隊」和歌山市の植物をしらべよう」を実施しました。

和歌山市は吉野川・紀の川の最下流に位置する街です。川上村との違いを意識しながら観察しました。講師に尾上聖子さん（奈良植物研究会）、ゲスト講師に山元晃さん（紀伊風土記の丘資料館学芸員）を招き実施しました。

会場となった紀伊風土記の丘は和歌山市郊外の里山に整備された公園です。集会所の駐車場で最初に目についたのが、メリケントキンソウ（キク科）。南アメリカ原産の外来種で、種子に鋭いトゲがあり危険です。自転車のタイヤも貫通するほどです。芝生などにはびこるとはだして歩いたり、手をついたりするとケガをします。奈良県でも明日香村の石舞台周辺などですで見つかっているの

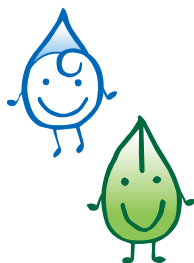


観察の合間に万葉植物を紹介し歌を詠む山元晃さん

で注意が必要です。

その他、アメリカカフワロ、ヒメアブタナ、マメカミツレなど多くの外来種が目立ちました。そんな中、セイヨウタンポポの隣に、在来のカンサイタンポポが見つかる少し安心しました。また、奈良県の特定希少野生動物植物に指定されているカツラギグミが園内に植栽されており、貴重な観察の機会となりました。

わずかな時間でしたが、お二人にご案内いただいたおかげで、90種の植物を観察することができました。



メリケントキンソウの種子（鋭いトゲがある）



メリケントキンソウ



カンサイタンポポ



セイヨウタンポポ



カツラギグミ
(奈良県特定希少野生動物植物)



アメリカカフロ

源流人募集



源流人とは

かけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは

集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

年会費	個人 2,000円
	家族 3,000円
	学生 1,000円
	団体 10,000円

郵便振替 00940-1-331163

もりもり 水源地の森守募金

にご協力ください

ありがとうございました。

平成26年度、166,590円の森守募金をお預かりしました。奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学

4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。今後ともご支援をよろしくお願いいたします。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて



表紙の写真：倒れたばかりのホオノキ。根元からはもう「ひこばえ」ががんばっていました。倒れた幹は、次の命の種になります。

発行日：平成27年7月発行
発行所：公益財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館
TEL:0746-52-0888